



1月号

ひだまり

今月のエッセー

天気が悪い？



あけましておめでとうございます。八ヶ月の海外研修を終え、昨年末に帰ってまいりました。私が訪れたアメリカ、フランス、イタリア、スイスはどこも美しい自然が印象的な国でした。しかし、場所によって寒暖・乾湿の差が激しく、移動のたびに变化する気候には悩まされました。

十二月、最後に過ごしたアメリカの禅寺は砂漠に近い標高一三〇〇メートルの山中にありました。晴れると暖かな日差しが差し込みますが、雨や曇りの日にはかなり冷え込みます。

ある雨の朝、親しくしていた人に「今

日は、天気が悪いね。」と話かけました。すると驚いたことに、彼は「天気が悪いだって？–とんでもない！」と言いました。「どうして？」

「良いか、悪いか、天気を二つに分けて考えるべきではないよ。雨がなかったら、水が手に入らない。太陽が出なかったら、草木は生えない。晴れの日も雨の日も、私たちにとっては欠くべからざるものなんだよ。」

彼の言葉に私は考えさせられてしまいました。確かに、砂漠のような場所では、雨は決して忌むべきものではなく、むしろ雨の水は大変貴重なものです。そんな場所で自由に水を飲み、食事をし、何なく自由なく生かされていることのありがたさを感じずにはいられません。晴天も、曇天も、雨も、雪も、どれもが素晴らしい大自然の恵みだったので。

「どんな天気であろうと、大自然の全てがありがたい」。乾いた砂漠の大地を見ながら、そう自然に思えてきました。

翌朝、曇った空を見ながら、彼に「いい天気だね。」と言うと、彼もうなずいてくれました。

◆輝元泰文

私たち、こんなことしています！

日常の研修風景より

『伝光会』



伝光会とは大本山總持寺（横浜鶴見）を開かれた瑩山禪師の説法を編纂した『伝光録』について研鑽を深め、報恩をする行事のことです。この伝光会に私たち研修生も参加させて頂きます。

總持寺では毎年六月頃に六日間行われ、一日中坐禅と提唱（講義）が繰り返されます。



總持寺の講堂
ここで『伝光会』の講義を受けます



總持寺の坐禅堂

『伝光録』には、お釈迦様から瑩山禪師のお師匠様までの五十三代、その間、仏教がどのように伝えられてきたかが伝記などを交えて記されています。

お釈迦様にも瑩山禪師にも、生きて実際に会うことは叶いませんが、『伝光録』を紐解くとき、二五〇〇年間、粛々と教えを守り伝えてこられた方々との尊い繋がりを感ずるので。 ◆畔柳公潤

編集後記



新年明けましておめでとうございます。年末年始、皆さんはいかがお過ごしでしたでしょうか。

私は一週間ばかり京都府宮津市のお寺に帰っていました。うちのお寺では三ヶ日の朝に必ずお雑煮をいただきます。一日はお吸い物、二日は白味噌仕立て、三日はぜんざい。それぞれ朝一番にご本尊様にお供えした後、修行僧たちに振る舞われます。新年のお雑煮は何だか気持ち新たにしてくれるようで、ワクワクしますね。

旧年中は私どもを温かくお見守りいただき有り難うございました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

◆羽賀孝行

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



二年度
大澤香有

『盲亀浮木』

古い經典の中に、「盲亀浮木」という譬え話があります。

ある時お釈迦様は、弟子に向かって言いられました。

「大海の底に、一匹の目の不自由な亀がいて、百年に一度だけ海面に頭を出す。この同じ大海に、浮木が漂流していて、この浮木に一つの穴が開いている。この亀が百年に一度の機会にその浮木に到達し、その木の穴に頭を入れることは一度でもありえるだろうか？」

すると弟子は答えました。「それは、ほとんどありえないのではないのでしょうか。」

お釈迦様は続けて言われました。

「誰でもこんな話はありませんかと思うだ

ろう。しかし、全くないとは言えない。いや。我々が人間に生まれるということなどは、これよりもさらにありえないことなのだから。しかしながら人々はそのことを知らずに、物事の道理に反したり、善を行わずに傷つけ合ったりする。あなたたち修行僧は、この尊い機会にしっかりと善行を行い、正しい道を歩みなさい。」

この話は、私たちが人間に生まれ仏法に出会い、善を修める機会を与えられていることが極めて稀で尊いことであるということを説いたお話です。

私は修行中、同じ部屋になった方とても仲良くなりました。笑顔が素敵な方でした。しかしある時、その方は一時的な心の病にかかってしまいました。

その病とは、強いストレスを受けると体から大量の汗を流し、まるで時が止まったかのようにその方の動きを止めてしまふものでした。その方は、折に触れて下を向き、時に何時間も動かなくなってしまうのです。

朝から晩まで掃除を担当していた私は、ある日、「私達ばかり片付けをして、あの人は座りこんで何も片付けをしない

んです！」と思わず他の修行僧に愚痴をこぼしてしまいました。

すると先輩僧侶に、「香有さん。修行ついでなのは掃除ができればいいものじゃないんだよ。あの人が今、どういう気持ちでいると思う？なんで動けないんだと思う？それをあなたが考えることができなかつたら、ここで修行する意味、ないと思うよ。」

と、さらりと言われてしまいました。私たちは皆、お釈迦様の譬え話にあったように、ありえないような「有り難い」この命を頂いています。しかしながら、時に自分の都合で他人を批判したり、自分を正当化したりしてしまいます。だからこそ、今ここにいる自分、また同じように目の前にいる相手一人一人が、自分と同じように、尊い存在なのだということを心に留めておかなければならないのでしょうか。

目の前の相手に思いやりのないことをしていないか、心無いことを言っていないか。そうして少し立ち止まり、考えてみる。支え合える関係を築いていくことができるのだと思います。

身近な仏事

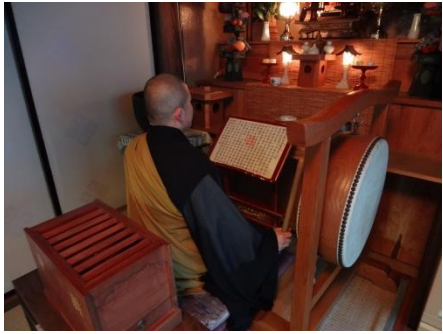
『祈祷法要』



平和や健康など、私たちの様々な願いを神仏に祈ることを「祈祷」と言います。日本では仏教が伝わった当初から盛んに行われ、国家の安泰を祈ることこそが僧侶の一番の役割とされてきました。

そういった人々の願いは時代によって変化し、現在では受験シーズンになると合格祈願、オリンピックなどのスポーツイベントが近づくに必勝祈願など、人々は多種多様な願いを胸に抱き、神社仏閣に参拝します。

主に曹洞宗寺院では木魚の代わりに太鼓を使い、その音に合わせてお経を読みます。そのため法事などの法要とは雰囲気異なりますが、法事でご先祖様の冥福を祈るのと同じように、私たち人間が持っている「祈り」という心の働きが形となって表れたものなのです。



太鼓による読経



◆堀江紀宏

ひだまり寺社巡り



世田谷区奥沢

『浄真寺』

浄真寺は世田谷区奥沢にある浄土宗の寺院で、一六七八年に建立されました。本堂の向かいには三つの阿弥陀堂があり、それぞれ三体ずつ合計九体の阿弥陀如来像が安置されています。

九体の阿弥陀如来像は全て異なった手印をしており、それぞれ極楽浄土へ往生するための九つの手段を表しています。これを「九品往生」といい、このことから浄真寺は通称「九品仏」とも言われています。

また、浄真寺には都の無形文化財に指定されている、「来迎会」という仏教行事があります。三年に一度行われるこの行事は、本堂と阿弥陀堂の間に渡された橋を菩薩の面をかぶった僧侶が渡るといふもので、菩薩の来迎を表しているといわれています。次回は来年八月十六日。他では見られない行事なので、一度見に行ってみてはいかがでしょうか。

◆中野太秀

